

四季竹図屏風について

加藤悦子

Folding Screen Depicting Bamboo in Four Seasons

はじめに

- ① 「四季竹図屏風」の概要
- ② 竹を描く伝統
- ③ 四季と竹林
- ④ 竹林七賢の趣向
- ⑤ 土佐派の絵画との関係
終わりに

【黒文解説】

メトロボリタン美術館に所蔵される「四季竹図屏風」は中世大和絵屏風として早くからその存在が知られていたが、その表現構造を主題とした考察はいまだになされていない。小論はこの問題を中心に竹を描く伝統、四季と竹林というテーマ、そこに盛られた趣向について考察し、さらに当時の文化的背景を勘案して、その制作背景について推定した。

竹を描く伝統は飛鳥時代まで遡れるが、十四世紀以前の絵巻に描かれた竹を収集・分析することにより、中国的文人の表象というイメージを保持しながら徐々に親密なモティーフとなつていったことを推定した。また中国の発達した竹画の流入と日本における竹林の造成の進展という二つの要因を踏まえて、十四世紀半ば頃には大画面の竹画制作の存在した可能性を指摘した。次に当屏風と「四季墨竹図」との類縁性及び李衍著『竹譜詳録』の箇などの描写の類似性から当作品における中国画の受容の様

相を具体的に指摘し、一方「四季花木図屏風」との類似から大和絵の伝統の継承についても指摘した。また当作品の反復する七本の竹に七賢のコノテーションが意図されていることを述べ、同時にそれが連歌やたて花という当時の和様文化において存在したことを探った。次に「芦屋釜下絵巻」中の「四季竹図」との造形的比較から、当作品が土佐光信の手になる可能性が高いことを指摘した。以上の諸点から当屏風が和漢の絵画表現を主体的に解釈・受容して制作されたことを挙げ、その作者として宮廷絵所職及び武家の御用を長く務めた光信こそ相応しいことを推定した。さらに七賢のコノテーションを生成・享受した環境として宗祇の連歌サークルを挙げ、光信がそこに属していたことを指摘し、上述の推定を補強した。最後に当屏風の温和な画風、多義的な趣向、四季表現の必然性が、屏風の用途及び唐物やつくり物たて花と屏風が共存／競合する文化的環境から醸成されたのではないかという解釈を示した。